

シダ ヲイロ

氏 名 島田 壮一郎

学位の種類 博士（工学）

学位記番号 博第1263号

学位授与の日付 2022年9月7日

学位授与の条件 学位規則第4条第1項該当 課程博士

学位論文題目 都市計画における住民参加の活動における不安感情に着目したコミュニケーション支援に関する研究
(A Study on Communication Support by Focusing on Anxiety Feelings in Resident Participation in Urban Planning)

論文審査委員 主査 教授 秀島 栄三
教授 藤田 素弘
准教授 鈴木 弘司
教授 鈴木 温
(名城大学)

論文内容の要旨

1969年に都市計画法が改正され、以降、都市計画のプロセスに様々な形で住民参加の枠組みを取り入れてきた。住民参加の活動においては、参加者が主体的に活動を行うことが求められ、主体間においてはコミュニケーションを行うことが不可欠である。この場合、思ったことを伝えられないようなコミュニケーションが苦手な人にとっては参加の障壁が高くなると考えられる。また、住民間の協働によって学びや創造を求めるワークショップでもコミュニケーションが必要とされ、コミュニケーションが得意ではない参加者は納得して参加することが難しくなるため、ファシリテーションなどの方法でコミュニケーションを支援することが望ましい。さらに、近年は新型コロナウイルス感染拡大防止のために、オンライン方式による住民参加の機会が増えている。オンラインでの議論では各参加者が同じ場所にいないことやカメラの映る範囲が狭いなどの問題によって送られるメッセージが伝わりにくくなるなど、コミュニケーションが阻害され、コミュニケーションのあり方が変わる可能性があり、またそれを受けてファシリテーションの方法も変えるべきと考えられる。

以上のことから、本研究では都市計画における住民参加の活動においてコミュニケーションを支援する方法を明らかにすることを目的として発言や会話への恐れであるコミ

コミュニケーション不安に着目した。そして、住民参加の活動形式などにより他者との関わり方が異なることから活動形式ごとの参加意志に関する分析、活動の中でもコミュニケーションが重要視されるワークショップに関する分析、コミュニケーションが阻害される可能性のあるオンラインでの議論に関する分析の3つの研究を行った。

第1章は本論文の序章であり、本研究の背景と目的について述べるとともに、住民参加が現状どのように行われているかの説明を行い、住民参加におけるコミュニケーションの重要性を述べた。

第2章では、本研究で対人不安及びコミュニケーション不安に着目したことを述べ、住民参加への参加意志について、ワークショップについて、オンラインでの議論についての三つの視点から対人不安およびコミュニケーション不安とどのような関係について分析を行ったかを述べた。住民参加への参加意志については対人不安と住民参加への参加意志との関係をまちづくり活動の形式ごとに分析することで住民参加の形式ごとに参加促進の方法について明らかにしたことを述べた。ワークショップにおける議論についてはコミュニケーション不安が参加者の納得の度合いにどのような関係があるかを分析し、ワークショップにおけるコミュニケーションの働きを考察し、ファシリテーションの技法を提案したことを述べた。オンライン会議については非言語コミュニケーションへの意識とコミュニケーション不安の関係について分析し、オンラインでの会議においてコミュニケーションの阻害になる要因について明らかにしたことを述べた。

第3章では、対人不安と住民参加への参加意志について分析した。分析結果よりどの活動においても対人不安が参加意志の要因になることが分かった。講習会や講演会のような他者と必ずしも関わらなくてよい活動においても対人不安の影響が見られた。また、パブリックコメントや住民説明会の参加意志に講習会や講演会への参加経験が要因になっていたり、陳情や請願の参加意志にまちづくり組織への参加経験が要因になっていたりすることから情報提供や繋がりを作るための支援をすることで参加意志を高めることが出来る。さらに講習会や講演会については参加への意識が高いと参加意志が高くなり、ワークショップについては年齢の低い人は参加への意識が低いと参加意志が高くなることから、活動の形式の違いごとに促進のための方法を考察した。

第4章では、ワークショップの参加者の参加者が感じるコミュニケーション不安と納得度にどのような関係があるかを分析した。分析結果よりコミュニケーション不安は結果に対する納得度だけでなく時間配分に対する納得度とも関係があることが分かった。また、コミュニケーション不安が低い参加者は積極的に発言することで時間配分に対する納得度が低くなりやすいという結果から、ファシリテーターは時間内にまとめたり、柔軟に辞意感配分を変えたりすることや他の活動への参加を勧めることが有効であると言

える。さらに、有識者のいるグループでは、コミュニケーション不安が高かったり、納得度が低かったりすることから、有識者がファシリテーターを担う場合は参加者を委縮させないように注意しなければならないことが分かった。

第5章では、オンラインでの議論における、非言語コミュニケーションに対する意識とコミュニケーション不安の関係を分析した。非言語コミュニケーションの種類によってコミュニケーション不安と相関がみられたものとそうでないものがあり、オンラインでの議論において伝わりにくいものとそうでないものがあると考えられる。またファシリテーターの有無で比較すると、ファシリテーター有りでは状態コミュニケーション不安が低だけでなく非言語コミュニケーションへの意識の分岐も少なくなっており、ファシリテーターによって非言語コミュニケーションが補うコミュニケーションについても促進できることが分かった。さらに、対象への興味があると非言語コミュニケーションの影響が少なくなることが分かり、ファシリテーターが楽しい雰囲気を作ることなどが有効であることが分かった。

以上をもとに第6章に結論をまとめた。住民参加の活動について対人不安およびコミュニケーション不安に着目して分析を行うことで参加促進やファシリテーションの技法についての提案を行うことが出来た。コミュニケーション不安が高いことによって発言量の増加が報告されていることから分かるように、一般的に参加者が積極的であることを示すと考えられている行動をとっていても必ずしも安心して参加しているとは限らない。住民参加の活動について多様な参加者間のコミュニケーションの支援が出来る。

論文審査結果の要旨

わが国では1968年に都市計画法が改正され、以降、都市計画のプロセスに様々な形で住民参加の枠組みを取り入れてきた。住民参加の活動においては、参加者が主体的に活動を行うことが求められ、コミュニケーションを行うことが不可欠である。この場合、思ったことを伝えられないようなコミュニケーションが苦手な人にとっては参加の障壁が高くなると考えられることや、参加者が納得して参加することが難しくなる。ファシリテーションなどの方法でコミュニケーションを支援することが望ましい。さらに、オンラインでの議論ではコミュニケーションが阻害され、コミュニケーションのあり方が変わる可能性がある。またそれを受けてファシリテーションの方法も変えるべきと考えられる。以上のことから、本研究では都市計画における住民参加の活動においてコミュニケーションを支援する方法を明らかにすることを目的として発言や会話への恐れであるコミュニケーション不安に着目した。

第1章は本論文の序章であり、本研究の背景と目的について述べるとともに、住民参加が現状どのように行われているかの説明を行い、住民参加におけるコミュニケーションの重要性を述べた。

第2章では、本研究で対人不安及びコミュニケーション不安に着目したことを述べ、住民参加への参加意志について、ワークショップについて、オンラインでの議論についての三つの視点から対人不安およびコミュニケーション不安とどのような関係について分析を行うかを述べた。

第3章では、対人不安と住民参加への参加意志について分析した。分析結果より、どのような活動においても対人不安が参加意志の要因になることが分かった。また、活動への参加意志には他参加者の参加経験が要因になることから、情報提供や繋がりを作るための支援をすることで参加意志を高めることが出来ると言える。さらに講習会や講演会については参加への意識が高いと参加意志が高くなり、ワークショップについては年齢の低い人は参加への意識が低いと参加意志が高くなることから、活動の形式の違いごとに促進のための方法を考察した。

第4章では、ワークショップの参加者の参加者が感じるコミュニケーション不安と納得度にどのような関係があるかを分析した。分析結果よりコミュニケーション不安は結果に対する納得度だけでなく時間配分に対する納得度とも関係があることが分かった。ファシリテーターは時間内にまとめたり、柔軟に時間配分を変えたりすることや他の活動への参加を勧めることが有効であると言える。さらに、有識者がファシリテーターを担う場合は参加者を委縮させないよう注意しなければならないことが分かった。

第5章では、オンラインでの議論における、非言語コミュニケーションに対する意識とコミュニケーション不安の関係を分析した。非言語コミュニケーションの種類によってコミュニケーション不安と相関がみられたものとそうでないものがあり、オンラインでの議論において伝わりにくいものとそうでないものがあると考えられる。またファシリテーターの有無で比較すると、ファシリテーターによって非言語コミュニケーションが補うコミュニケーションについても促進できることが分かった。さらに、対象への興味があると非言語コミュニケーションの影響が少なくなることが分かり、ファシリテーターが楽しい雰囲気を作ることなどが有効であることが分かった。

以上の研究成果をもとに第6章に結論をまとめた。住民参加の活動について対人不安およびコミュニケーション不安に着目して分析を行うことで参加促進やファシリテーションの技法について提案を行うことが出来た。本提案を踏まえることで都市計画における住民参加の活動について多様な参加者間のコミュニケーションの支援が可能となる。

なお、本研究の内容は、土木学会土木計画学研究発表会等で発表され、一部が土木学会論文集に掲載されている。

以上により、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認められる。